

(別紙2)

審査結果の要旨

氏名 甲元眞之

中国では1950年代以降、数多くの発掘調査によって新石器時代に関する膨大な資料が蓄積され、編年や集落・墓地研究が進められた結果、中国各地に多様な新石器文化が展開し、数千年にわたる変遷の末に都市の形成、初期の国家形成に至ることが明らかにされつつある。

しかしながら、各地の新石器文化の経済的基礎をなす生業については、黄河流域以北の畑作地帯と淮河・長江以南の稲作地帯が大雑把に対照されてはいるが、それぞれの生業の実態とその背景に対する詳細な研究は大幅に遅れている実状にある。

本論文は中国新石器時代の黄河流域と長江・淮河流域を対象として、両地域の生業形態、社会組織の違いとその要因を明らかにしようとする最初の本格的、総合的研究である。

その方法の特徴は、理論的枠組みに適宜資料を当てはめる演繹的なものではなく、遺跡から出土する栽培穀物遺体、採集植物遺体、狩猟動物と家畜動物の骨、採取された魚・貝の遺存体を、発掘報告書から細大漏らさず集成する基礎作業をもとに、その種類・数量の地理的分布、時期的変化を明らかにし、新石器時代の長期的な気候変動をも考慮して、黄河流域と長江・淮河流域の生業活動の差異と変遷を論ずる点にある。また資料の解釈に際し、しばしば歴史資料や民俗誌を参照することも特徴といえよう。

こうした方法によって提出された特筆すべき見解の若干を以下にあげよう。

まず中国においていかにして農耕が生まれるかという、これまで具体的に論じられること
のなかった問題に対しては、とくに稲作を対象に次のような説得的な仮説を提起する。すなわち、すでに後期旧石器時代には小型獣の狩猟、漁撈、植物採集という「水辺での徹底した食料の開拓活動」が始まり、これが新石器時代に入ってから後氷期の温暖化・湿潤化とともに一層強められることを明らかにし、長江流域ではこの生業活動に、ヤンガー・ドライアス期の気候悪化に適応して生態的に変化した野生稲も取り入れられて稲栽培が始まったとする。野生稲の生態的变化と栽培化については作物学的に十分な論証はまだ得られていないが、後期旧石器時代以降の生態変化に対応した生業の変化の問題がはじめて具体的議論の出発点を得たと評価できる。

従来の北の畑作、南の稲作とというおおまかな生業の地域的違いも、生業にかかわるあらゆる自然遺物資料を積み重ねて農耕・狩猟・採集・漁撈の細かな組み合わせを復元し、黄河流域では多種類の畑作物の栽培と複数種類の動物の飼育に狩猟を加えた多角的生

業形態であるのに対し、長江と淮河流域では稲作を中心に水辺での生態環境に適応した選別的な生業形態をとるとし、南北の生業の実態を鮮明に対比した点は高く評価される。

こうした生業形態を異にする社会については、黄河流域と淮河流域の代表的集落と墓地遺跡を分析し、集落構成と墓地構成の対応などから、両地域とも当初は双系的親族組織であったが、黄河流域では系譜を重視しさらに父系強調へ変化し早くから社会分化が生じたのに対し、淮河流域では出自を強調する抜歯習俗が継続する点から社会分化が遅れること、さらに土器の文様や特殊な副葬品を多くの歴史資料と民俗誌をも援用して考察し、黄河流域と淮河流域では再生観念に違いのあったことを論じ、今後の研究の定点を提出する。

以上のように本論文は、新石器時代の膨大な発掘調査成果から栽培植物、採集植物、家畜動物、狩猟動物を網羅的に集成し、各食料源の組み合わせ方のいわば生態的法則を明らかにして、生業の地理的な相違と時系列的変化を解明し、さらに集落や墓地の分析から南北の社会の差異と変化を描き、この領域の研究を格段に深化させたと評価できる。黄河流域における農耕誕生のプロセスが長江流域ほど明確にされていないことや、生業と社会組織との対応の論証に整合性を欠く点はあるが、中国新石器時代研究を飛躍的に進展させるとともに、東アジア各地の農耕社会の形成と展開を研究する上で基準となる研究であることはいうまでもない。

よって審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するに値すると判定する。